

「令和 2 年度群馬県立自然史博物館活動の評価」について

丹青研究所 文化空間情報部部長 石川貴敏

10 月 6 日の「群馬県立自然史博物館評価委員会」は初のオンラインによる開催でした。評価委員会では、今回で 10 回目（10 年目）となる内部評価の結果をもとに、令和 2 年度における博物館活動の報告を受けました。一年を通じて新型コロナウイルス感染症による影響が続いた令和 2 年度でしたが、多くの制約がある中、各係の職員が状況に応じた工夫を図りながら取り組んでいたことを実績値等とともに確認することができました。報告の随所にオンラインを活用した取組が見られ、博物館としての活動の可能性が広がったことも感じました。毎年、真摯に取り組み、事業の改善を図っている博物館（職員）ですので、より多くの人に利用していただきたいと思っています。

一方、今回も大きな課題は「収蔵スペース不足」でした。「令和 2 年度 自然史博物館活動の評価結果」には「収蔵スペースの不足は以前から深刻な問題となっており、第一収蔵庫・第二収蔵庫ともに慢性的かつ深刻な問題は解消できていない」「収蔵スペースに対して資料がオーバーフローしている非常事態」「収蔵資料は今後も増え続けるため、収蔵庫の必要性をはたらきかけていきたい」の記載が見られ、喫緊の課題となっていることは明白です。「博物館基本構想」（群馬県立自然史博物館これからの 10 年）に「博物館活動の基盤となる機能」と記されている資料収集保管機能を十分に果たすことができない状態は早期に改善しなくてはなりません。収蔵スペース不足の問題は、群馬県立自然史博物館だけの問題ではなく、世界中の多くの博物館が抱えている課題です。栃木県立博物館、兵庫県立人と自然の博物館をはじめ、各地の公立博物館・美術館でも収蔵スペースの増改築を行っている事例が見られます。こうした時流を逃すことなく、積極的に取り組んでいただきたいと思います。整備実現に際しては、県民をはじめ一般の人々の理解や共感を得ることが必要です。博物館活動の根幹というべき収蔵資料の魅力を最もダイレクトに伝えることができるのは「収蔵庫」ではないでしょうか。なかなか一般の人々が見る（立ち入る）ことができない収蔵スペースにアクセスできる機会をオンラインによって増やすことで、現状に対する理解を広げていただきたいと思います。

令和 3 年 9 月 30 日、緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置は全都道府県で解除されました。これで、すぐにコロナ前の状況に戻るわけではなく、しばらくの間はウィズコロナの意識で引き続き感染拡大の防止に努めながら、博物館事業に取り組むこととなります。令和 2 年度は「インターネットによる情報発信の推進」に積極的に取り組み、HPやSNSを用いた情報発信件数を伸ばしました。館内における「三密（密閉・密集・密接）」な状況を防ぐため、時間指定や人数制限による事前予約制の開館形態がしばらく続くことでしょう。ここでも、利用者の裾野を広げるための取組が必要だと思っています。一般的に、博物館は子どもたちや高齢者の利用が多く、働き盛りの人たちや子育てに取り組む人たちの

利用促進が課題となってきました。博物館を訪れる時間がない、機会が持てないという人々たちに対しても、オンラインによる事業展開は有効に機能するのではないかと思います。ただし、これまでの事業にそのままオンライン事業を加えるのでは、博物館（職員）にとって過大な負担となる懸念があります。現地（館内等で）の取組とオンラインの取組の長所を理解し、計画的に使い分け、効果的なハイブリッドの事業形態を協議・検討する必要があります。群馬県立自然史博物館の特徴は「リピーター率と満足度の高さ」にあります。まだ、来館したことがない人々たち、気づいていない人々たちに一人でも多くこの博物館を知ってもらい、来館や利用につなげていただきたいと思います。オンラインによって博物館へのアクセシビリティをさらに高めてください。

開館時から大規模な更新を行っていない常設展示についても、30周年を迎える令和8年度（2026年度）に向けてリニューアル計画に取り組む必要があります。2000年代以降、フレキシブルに更新できる展示が求められる要素の一つに挙げられていましたが、近年のデジタル技術の急速な進展は解決策の一つになると思います。必要に応じて追加・更新したり、同じ展示空間でも新たな楽しみ方やストーリー展開を付することもできます。博物館（の展示）で感じたこと（学んだこと）を即座に記録したり、博物館（職員）に投稿することも可能だと思います。博物館での記憶（体験）を振り返ることができるように残すことは、博物館利用にとって重要なことだと思います。スマートフォンで写真を撮ったり、スクリーンショットをして、感じたことを口コミ（拡散・展開）してもらうことも必要です。日本科学未来館には「オピニオン・バンク」という科学や社会にまつわる問題にアンケート形式で意見を発信するコーナーがあります（最近では常設展示内の端末だけでなく、ウェブサイト版もできたようです）。現代は「個人化（パーソナライゼーション）」と「多様性（ダイバーシティ）」の時代でもあります。デジタル技術を用いて、その人に合わせた博物館の楽しみ方ができるとともに、一つの事象に対してさまざまな意見や考え方・捉え方があることを知ることもできる展示が必要ではないかと思います。

収蔵スペース不足の解消、常設展示の大規模な更新は数年かけて整備する課題です。現在、博物館活動に参画・協力・支援している人々たちから、さらに多くの人々に博物館が抱えている課題に関心を持ってもらえるよう、理解と共感の輪を広げてほしいと思います。一方、すぐに取り組むことができる実現可能な課題もあります。令和2年度の報告に見られたように、令和3年度以降も各係の職員ができることからさらなる工夫と改善に取り組んでいただきたいと思います。令和3年に入り、新型コロナウイルス感染症対策、「新しい生活様式」、オンライン社会等の社会状況を踏まえた新たな中長期計画やビジョンが各地の博物館から発表されています。社会制度の大きな転換期を迎えている中、これからの博物館のあり方を見据えながら、「人々の、人々による、人々のための開かれた博物館」を実現していただきたいと思います。